

新世紀ミュージアム

学術資料の収集、研究、成果の公開をおこなう博物館。知の空間である博物館は、大学という場を舞台とした場合、どのように活動を展開することができるのだろうか。大学の学術研究という財産を継承してきた大学博物館を紹介する。

台湾における大学博物館の嚆矢
台湾は一八九五年から五〇年間、日本の施政下にあった。統治機関であった台湾総督府は、一九二八年に植民地における高等教育機関として、七番目の帝大、文政学部と理農学部を擁する台北帝国大学を設立した。台北帝国大



国立台湾大学人類学博物館正面

学は後に国立台湾大学に引き継がれ、台湾の最高学府として優れた人材を輩出するとともに、学術研究を積み重ねている。

帝国大学時代から現在にいたるまで、台湾大学でおこなわれた研究に関する資料を大切に保管し、積み重ねられてきた学術研究の成果を広く一般に公開しているのが、「台大博物館群」と総称されている大学博物館である。物理学、地質学、昆虫学、農学、植物学、動物学、医学、アーカイブズといった自然科学を主体とした博物館や資料館が並ぶなかで、人文学の博物館として存在感を放っているのが、「人類学博物館」（以下台大人類博）である。大学博物館ではあるが、観覧は無料であり、知の空間は市民にも開かれている。

台大人類博の設立は一九二八年にさかのぼる。文政学部を構成する講座のひとつであった土俗・人種学講座の標本室と陳列室がその出発点となった。

人類学、民族学、考古学の研究と教育をおこなう場所に、学術資料の収集と研究、保管を実践するための施設を設けたことは慧眼のいたりである。

最初の民族誌コレクション

とはいえ、あらたにできた講座の標本室はもろろん空っぽであった。徐々に収集を進めていけばいいのだが、やはり研究の基盤となるコレクションはほしくなる。それを見越したのか、講座の初代の主任であった移川子之蔵教授は、講座の設立に先立ち、岩手県遠野をたずねた。遠野には当時、「台湾館」とよばれていた展示施設が存在し、伊能嘉矩（一八六七―一九二五）という人物が台湾で収集し日本にもち帰った資料が展示されていた。



伊能嘉矩 (1867-1925)

伊能は遠野出身の歴史学者である。漢籍に通じるとともに、東京帝国大学で坪井正五郎の講義を聴講するなど、継がれていった。

二一世紀にはいり、台湾大学は大学博物館を充実させ、考古人類学系の標本室と陳列室はリニューアルし、台大人類博としてあらたなスタートをきった。日本統治時代から使われてきた陳列棚を活かした展示（上右写真）をおこない、一世紀に近い歴史の重みを感じさせてくれる。一方で、知の交流ともいうべきあらたな取り組みにも挑戦している。

二〇一五年、台大人類博の展示品で、四方に顔をもつ「佳平旧社金祿勒頭目家四面祖靈柱」とよばれるパイワン族の木彫祖先像（上左写真）が国宝の認定を受けた。現地集落の人びとと台大人類博はこれを機に、祖霊柱が女性の像だったことから、像を台大人類博に嫁入りさせることにし、合同で婚姻の儀礼をおこなった。両者はパイワン族の祖霊が結ぶあらたな関係をもつことになった。外に開こうとする大学博物館と博物館を信頼するソースコミュニティ、台湾原住民研究を志すものにとって、ちよっと自慢したくなる挿話の主役たちである。

人類学にも強い関心を抱いていた。柳田國男との親交もあり、日本の民俗についても造詣が深く、例えばオシラ信仰に関する本格的な論考をいち早く著したのも伊能である。

伊能は植民地統治がはじまってからすぐに渡台し、台湾全域を踏査した。オーストロネシア系先住民族や漢族化が進んだ平埔族の歴史人類学的な調査をおこない、『東京人類学会雑誌』等に数多くの論文を発表するとともに、現地で使用されていた衣服や生活用品、儀礼品の収集をおこなった。伊能は収集した資料の一部を東京帝国大学の人類学教室に寄贈したが、その大半は故郷の遠野にもち帰っていた。

移川は伊能の家族に台湾における学術研究の重要性をとき、あらたにできる大学の標本室への資料の寄贈を懇願した。果たして、伊能が台湾で収集した資料は蔵書とともにふたたび台湾の地を踏むことになり、台北帝国大学土俗・人種学講座の標本室、図書館に収蔵された。台湾にもどらなかつた資料は他の東大資料とともに、後に民博に寄託された。

新世紀の台大人類博

帝大土俗・人種学講座は、第二次世



佳平旧社金祿勒頭目家四面祖靈柱 (写真提供：国立台湾大学人類学博物館)



木製の標本ケースが歴史を感じさせる展示室 (写真提供：国立台湾大学人類学博物館)